

研究課題：5 歳児健診実施に伴う運動指導プログラムの開発と地域支援のためのネットワーク構築

研究代表者：宇部弘子

本研究の目的は、群馬県草津町における地域援助ネットワークを構築し、5 歳児運動健診におけるスクリーニングのために有効な運動プログラムを開発することにある。

平成 24 年度の 5 歳児運動健診は、草津町の新規事業として地域支援ネットワークを中心とした教育委員会の就学指導の一環として行われた。そこには、従来の健診を充実させ、発達障がいのある子どもたちへの気づきを促し、より適切な対応と就学への準備につなげたいとの意図がみてとれる。もっとも、草津町のような小規模自治体では、閉鎖性もあり、発達障がいに対する誤った認識が出現しやすいのも事実である。今回も、新規事業であることともあいまって、発達障がいの指摘やスクリーニングを受けること自体に対し、対象児と保護者が感じるであろう抵抗を少しでも減じるため、外部から専門家チームの導入を提案し、実現させた。このチームは、健診を受ける当事者にとって、町の外から来て外に帰る、個人的な視点ではなく専門的な視点で判断する存在となる。これにより、困惑や憤りは外の専門家に向けられ、地域の専門家は援助者となり、日常を支えることが可能となった。また、今回の健診では、①乳幼児期の育ち（保健師）、②日常生活の様子（保育士・幼稚園教諭）、③作業の特徴（臨床心理士）、④運動の特徴（臨床心理士）、⑤観察による診断（精神科医）、⑥関わりによる印象（学生）、⑥知能検査による精密健診（教育事務所）がそれぞれの立場で対象児に対する情報を提供した。なかでも、運動にみられる特徴から得られた情報は、作業の相違の枠を超え、医師の観察による診断や知能検査との共通点も見いだせている。さらに、特記すべきは子どもをサポートするために参加していた学生からの感想や報告に含まれる情報に共通点が見出せたことである。このことから、5 歳児の運動健診は、軽度発達障がいのスクリーニングにおいて客観的で具体的な情報を集約・提供する手法として有用であり、健診での特徴が小学校に事前に提供されることで、より具体的な支援につながることを期待される。